

本書は東京大学大学院に提出された博士論文がもとになっている。註を含めると466頁の堂々たる大著である。本書で取り上げられるジャン＝ジョゼフ・スュラン Jean-Joseph Surin (1600～1665) は、フランス17世紀神秘主義思想家である。近代以降の神秘主義が信仰のあるなしに関係なく個人的体験を中心とするのに対して、近世の神秘主義は信仰のかつ共同体的な性格を持つものとして位置づけられる。

我々は、そのような神秘主義が現実味を帯びて語られる時代の歴史性をも考慮に入れる必要がある。スュランが生きていた時代は、神とともに悪魔の實在が信じられていた時代、そして悪魔を退治するためには火焙りの刑をも辞さなかった時代でもあった。

現代でもカトリック教会の聖体拝領では、葡萄酒とパンはその実体としてキリストの血と肉になるという化体説を取る。この秘蹟は一種の超常的な現象とも解することができる。スュラン在世当時は、そうしたカトリックの信仰世界がより色濃く歴史性を帯びて存しており、信者たちもまた超常的な体験が起こりうることを確信していた。

このような信仰的現実、神秘主義の言語でしか語ることができない。それは既成神学の枠組みの中には収まりきれず、当時であっても種々の論争を呼んだが、後世になれば精神分析や深層心理学が引き受ける領域とも重なってもこよう。スュランが信仰の闇、愛に満ちた闇について語り、救いの中にある闇の部分に接近を試みる時、我々はその内に限りなく今日的な臨床的かつ実存的な志向性を感じるのである。

スュランの生涯で特筆すべきは1634年、34歳のとき全人格を賭して祓魔師を務めたことだ。フランス中西部の小都市ルダンにある女子修道院で、ジャンヌという名の修道院長以下ほとんど全員が悪魔憑き現象を呈した。これはルダンの悪魔憑き事件として知られ、小説や映画にもなっている(現代ポーランドの作家イヴァシュキェヴィッチの名作『尼僧ヨアンナ』では物語の舞台をポーランドに移し、スュランはスーリン神父として登場する)。

スュランはジャンヌに対して、当時としては斬新な臨床的な対話的手法を用いて悪魔祓いを行う。彼は全身全霊を傾けてこれに努め、ジャンヌに憑いた悪霊を自分に引き受けたいとまで願った。そしてジャンヌの症状が軽減する一方で、今度は彼自身が悪魔憑きの症状を出し、修道院の救護室に収容されることになる。彼はその後も投身自殺未遂を引き起こしたりして、心身の麻痺状態は実に15年以上も続いた。50歳の頃になって症状はようやく快方に向かい、54歳の頃から口述で著述を始める。そして1665年に65歳で故郷のポルドーに没するまで、司祭としての活動の傍ら数多くの神秘主義的著作を著した。

スュランの著作の主なもの、『霊のカテキスム』『霊の導き』『霊的対話集』『神の愛についての問い』など(以上、霊的指導書)、『神の愛の勝利』『経験の学知』(以上、自伝類)である。彼はまた600通近くの書簡を書き記したが、ジャンヌ宛のものがその約4分の1を占め、それ以外の書簡も修道女宛のものが圧倒的に多い。それは多分に霊的指導のためのテキストであった。

スュランは『神の愛の勝利』の中で自ら悪魔憑き事件について報告をしている。ジャンヌの身には、悪魔が退くとともに守護天使が出現し、聖痕が肉体の上に刻まれるなどの超常的な出

来事が生じた。彼女がそうした超常的体験に強くこだわるのに対して、スュランは距離感を持ちつつも、信仰の共感をもって対応する。超常的体験というのは、「しがなき人々」と同じ生の地平に立つ信仰へと回帰していかなければならないのだ。

この回帰の行程は、現前する神との関係から不在の神との関係という、神＝他者との関わり方そのものの根本的な変容を意味する。

現前の神は見るができるが、目の前に現れない(闇の中にあつて現前しない)神はもはや信じることしかできない。そうした「暗き信仰」は、愛の傷から湧き上がるものとして語られる。不在の神を求めてさまよう魂を愛に満たす闇、そしてこの闇の中での信仰がスュランの神秘主義の核心となるのである。

本書は、スュランの神秘主義思想だけでなく、彼の思想の背景をなすフランス17世紀の神秘主義思想の歴史的特性について詳細に説き起こし、我々の神秘主義理解を豊かにしてくれる。それまで神秘的 *mystique* と形容詞だったものが神秘主義 *la mystique* と実名詞化して、これが独自の思想/実践として登場したのが近世、とりわけ17世紀フランスであった。このとき神秘主義は新しい「学知」としての性格を獲得する。そして、スュランの代表作がまさに『経験の学知』という表題を有しているのである。スコラ神学や哲学の学知に対抗して、彼は自らの信仰の神秘主義を新しい学知として打ち出すべく、「戦う神秘思想家」あるいは「宣教の神秘家」として、そのような反神秘主義に対して論争を挑んだのであった。

スュランはその神秘主義思想を自ら生きた。それは、ルダンでの祓魔師の経験、彼自身の15年にも及ぶ魂の暗夜、そしてそこからの霊的回復の道程でもあった。小説の『尼僧ヨアンナ』では、悪魔を身に引き受けたスーリン神父は結末で恐るべき現実の罪を犯してしまうが、スュラン神父は自らの過酷な体験から偉大な信仰の思想を創造することができた。スュランの人生とその思想を知ることによって、我々が学ぶべきものがあるとすれば、それは「魂の暗夜」における彼の過酷な体験と苦悩の中から、これらを超克する信仰を通じて形成される宗教思想の創造の姿ではないだろうか。

本書の目次は次の通り。

序章 17世紀フランス神秘主義とジャン＝ジョゼフ・スュラン

第I部 近世神秘主義の地平

第1章 「経験の学知」《la science expérimentale》

第2章 名もなき証言者たちとの呼応

第II部 論争を超えて

第3章 スュランと反神秘主義

第4章 純粋な愛と純粋な信仰—魂の「暗夜」の解釈をめぐる

第III部 現前と不在の彼方

第5章 信仰への回帰

第6章 永遠の城外区にて

結論

